

平泉〈音風景〉のアルケオロジー —御一馬をめぐる—

木村直弘*

(2013年1月8日受理)

0. はじめに ～「春の藤原まつり」の音風景

〈音風景〉とは、カナダの現代音楽作曲家・音楽教育家マリー・シェーファー (1933～) が1960年代末に、「音」を意味する「サウンド sound」と「～景」を意味する接尾語「～スケープ -scape」から造語し提唱した「サウンドスケープ Soundscape」という術語の訳語である。以下、日本サウンドスケープ協会公式ウェブサイトの用語説明から一部を引くと、

サウンドスケープという用語とその考え方は、地球上のさまざまな時代や地域の人々が、音の世界を通じて自分たちの環境とどのような関係を取り結んでいるのか、どのような音を聞き取りそこからどのような情報等を得ているのかを問題とし、それぞれの音環境を個別の「文化的事象／音の文化」として位置づけます。したがって、サウンドスケープとは「世界を聴（聞）く行為、音の世界を体験する行為によっておのずと立ち表れてくる意味世界」であるともいえるのです。⁽¹⁾

人間とその音環境との関係を探るにあたって、シェーファーがこのサウンドスケープの重要な特徴として挙げたのは、〈基調音Keynote sounds〉〈音信号Sound signals〉〈音標識Soundmark〉の3つである。〈基調音〉とは、ある共同体にあって、いわば後景的に（ゲシュタルト心理学的に言えば「地」として）絶えず鳴り響いているが意識的に聞かれることはない音を指す。これに対し、〈音信号〉とは、特定の意味を伝達し、前景（ゲシュタルト心理学的に言えば「図」）として意識的に聴かれなければならない音である。そして〈音標識〉とは、〈音信号〉の中でも特に共同体によって尊重され、注意されるシンボリックの意味合いが強い音を指す。

たとえば、岩手県の平泉を例にとると、世界文化遺産に登録された観光地であるので、〈基調音〉としては、観光バスや観光客のたてる賑やかな音などが挙げられるだろうし、〈音信号〉としては、平泉町役場から毎日正午に流されるチャイムや、午後5時に流される「夕焼け小焼け」のメロディなどが挙げられる。そして、〈音標識〉としては、毎年ゴールデンウィークに(社)平泉観光協会主催で行われる「春の藤原まつり」における様々な音がそれにあたる。別表(57頁参照)に示したように、空間的には、中尊寺および毛越寺という両極とそれらを媒介する中間的場としての駅前広場や旧観自在王院庭園など、3つの空間に分けられる。そして、両極を

* 岩手大学教育学部音楽学研究室

媒介するものとして、町内神輿および県内の各団体による郷土芸能が、かならずその3箇所では披露される。

また、時間的にみても、やはりこの「春の藤原まつり」は3部分に大別されうる。すなわち、第一は、中尊寺・毛越寺両極ではほぼ同時進行する、前半の、開山大師や藤原四代あるいは源義経の供養法要といった仏教祭祀、第二は、後半の、古実式三番や延年の舞などに代表される神事的伝統芸能に、そして第三に、観光的にはこのまつりのピークと位置づけられる「源義経公東下り行列」に顕著な、両極間を結ぶ移動的イベントである。よって、「春の藤原まつり」の〈音風景〉は、観光客や観光車両のたてる地の音を背景に、交差点での信号音や平泉駅での列車の発着音などの〈音信号〉も含みつつ、すぐれて平泉を特徴づける〈音標識〉、すなわち仏教儀礼の音、神事的伝統芸能の音、郷土芸能の音、そして、行列の先導あるいは中間地点での吹奏楽やラジオ拡声器による大音量の音、などによって構成されていると言える。

さて、春の藤原まつりのようなまさに今現実に鳴り響く音の世界だけでなく、たとえばこの平泉の地に、かつてどのような〈音風景〉があったのかについては、シェーファーが「耳の証人」⁽²⁾と呼ぶところの、さまざまな古文書等の記録類や文学・神話、あるいは絵画史料などを手がかりとして推測することが可能である。そこで、この小論では、前掲・平泉におけるいにしへの〈音風景〉を今に伝える絵画史料「平泉諸寺祭礼曼荼羅」（二幅一対・紙本著色、中尊寺蔵・桃山末期～江戸初期）を「耳の証人」としてとりあげ、そこに描かれた〈音風景〉が示す「音の文化」を明らかにすることを目的とする。そこで注目すべき〈音風景〉としては、右幅に描かれた「御一馬（おひとつま）」、左幅に描かれた「哭（なき）まつり」と「印地打」、そして両幅に描かれた「鐘声」が挙げられるが、本稿では、紙幅の都合上、これらのうちから「御一馬」をめぐる〈音風景〉に考察対象をしばり論じてゆくことにする。

1. 白山社祭礼の音風景

「御一馬」とは、かつて中尊寺で最も重要で最大の法会であった「春の御神事」、すなわち卯月初午の日に行われる鎮守・白山社の祈禱会である白山社祭礼の初日（午の日）の行事で、「平泉諸寺祭礼曼荼羅」右幅上部に描かれた、金堂を出発し、白山社へ、右斜め上へと向かう行列がそれである。右の白山社前には、行列の先頭、びんざさら（編木）や太鼓を奏する田楽衆（8人）がすでに到着し輪になって踊っている。続いて、獅子舞、稚児を載せた白馬、さらに阿波踊りのように両手を挙げつつ列をなして進む者たち（6人）が描かれている。四月初午の日に行われる神事祭礼である「御一馬」は中尊寺一山でも最大の年間行事である白山社例祭でも最重要視された行事であった。祭礼に奉仕する特別の童子のことを「一つ物」と呼ぶが、中尊寺の場合は、一山で寺院の跡継ぎとなる子弟が7歳になったとき、腰に葦の葉を差し、手に牡丹の花（獅子愛）をもたせ、白い神馬に乗って行列の中心となって金堂から白山社まで渡御するので、「お一つ馬」と呼ばれている。明治元（1868）年明治新政府による神仏分離令（神仏判然令）によって取りやめとなり、現在も復興されてはいないこの祭礼に関して、前述の絵画史料の次に古い文献史料は、江戸中期、仙台藩の藩医員を務めながら旧跡を調査した相原友直が安永二（1773）年に完成した『平泉雑記』巻之五⁽³⁾である。そして、その次に挙げられるのが、江戸後期の旅行家・菅江真澄（1754-1829）による紀行日記『かすむこまがた』天明六（1786）年正月20日の記述と、同じく『はしわのわかば』同年4月9日（初午の日）の記述

である⁽⁴⁾。前者は毛越寺常行堂の二十日夜祭を、後者は、中尊寺白山社の祭礼を、それぞれ自分の目で観てレポートしているが、たとえば初めて平泉を訪れた際の記録である前者にも、白山社の祭礼についての記述は見られる。次に挙げられるのは、幕末勤王の士で後に一関・田村藩教成館学頭になった高平眞藤（本名：高平清敏）が、平泉研究の先達・相原友直の平泉三部作（『平泉実記』、『平泉旧跡志』、『平泉雑記』）をふまえて書き上げた『平泉志』巻之下（明治十六・1883年完成で明治十九・1886年に出版）の記述がある。これは、相原の著作と重複する部分が多いものの、明治の神仏分離の前後の状況などについても少し触れてあるので、看過されるべきではない。さらに、昭和八（1933）年2月段階の情報となるが、前掲史料をふまえた上で（当該箇所全てについて引用あり）、中尊寺の僧侶から直接聞き取りを行い（後述）、昭和四四（1969）年に2回行なわれたフィールドワークの記録も含まれる日本芸能史学の泰斗・本田安次による論考（1969年）⁽⁵⁾がある。これは、当時発見された円乗院蔵文書（古実式三番伝書本他）に依拠して、「田楽」「ロウ（郎）舞」「太々神楽」「獅子舞」「御一箇馬」「故実舞」（式三番）「能」などの芸能について、作法や由来など詳述したもので、特に、明治期以降におけるこれらの行事の受容についての情報が満載されているため、白山社祭礼に関する最も重要度が高い文献と言っても過言ではない。さらに、岩手をフィールドとした民俗学者・門屋光昭が内容をかいつまんで紹介している⁽⁶⁾、江戸後期・文政五（1822）年に書写された『年中行状記』（大長壽院文書）や同じく天保三（1832）年に書かれた『関山中尊寺歳中行事』（仙台・仙岳院文書）といった祭礼を担う側の内部文書における記述⁽⁷⁾もこの祭礼の音風景を調べるのにきわめて有用である。

ここでは、まず『平泉志』巻之下から白山社についての記述を引用しておこう。

白山宮

金色堂の東北にあり仁明天皇の御宇嘉祥三年慈覺大師の勧請尔して加賀の白山を分祀し白山権現と号せり即大師の作十一面観音を本地佛とす配佛正観音は運慶作尔して樋爪五郎孝衡の持佛なり毘沙門天は源義經の持佛なり宮殿は豎横六尺奥行一尺六寸許徳治三年の建立にして大檀那法橋實源と記名あり嘉永二年焼失尔懼り今の社祠拜殿は同六年伊達家の再建なり維新後改革に由り村社白山社となり（一宮社白山姫神社伊並尊とあり）佛体を他堂に遷座せり舊別當は法泉院なり

古祭式

白山社祭禮古来毎年四月初午未の兩日なり午の刻に殿内に山吹一束（枝葉一尺許）を納む次に獅子舞あり傳て白山神遙迎式と云此舞獅子ハ北條時代の寄附也といへり次に御一箇馬オヒトツツマと稱し衆徒中男子の七歳なるを選び二七日潔齋をなさしめ装束して腰に芦葉を挿み飾馬ウマ乗る（口附二人）笠上尔月日象を戴く供奉六人各造花を立たる笠を着け長刀木太刀脱沙ハリスキウサキ兜を持つ金堂址より乗馬し社前にて下乗し造花を四方に投散志馬を急に牽還す此馬嘴くを以て凶兆とす次に舞台にて田楽あり胡桃木の皮尔て方平尔二尺餘の綱代を組織し四邊に七五三シチゴサンを下げ上に造花を立たるものを笠尔し太鼓を首に懸け敲く者ありサイウ鼈を鳴す者あり都て八人鼓吹して囃し拍子して舞踏す次尔開口式あり装束して老翁の假面を被り立ながら四方に向ひ一山の縁起風景を頌す次尔祝詞の式あり納袴の装束して幣帛を持ち社前に對ひ當社の由来を演へ天下泰平國家安穩五穀成就君民息災を祈る次尔若女の舞と云ふあり少女の假面を被り鈴と扇とを把て舞ふ次尔老女舞姫の假面を被り腰を屈め舞ふ事同し次尔能數番衆徒各其役を務む始尔衆徒輪座轉經あり奇古の祭儀往々沿革し今猶舞臺を營し能樂を修せり⁽⁸⁾

ここに記されたわかりやすい〈音風景〉を挙げておけば、獅子舞、結衆たちが田楽を奏す際、太鼓、簾、笛を鼓吹し舞踏する音、式三番（特に、鈴）や神事能での音、さらに偶発的ではあるが、発せられた場合〈音象徴〉としてきわめて重要な意味をもつ御一馬の嘶きといったことになる。

1.1. 白山社祭礼前日までの音風景

『平泉雑記』の記述に「二七日潔齋ヲ為サシメ」とあったが「二七日」とは「二×七ケ日」すなわち14日間という意味になる。この三月末の午の日から開始される精進潔齋の「前行」からすでに祭礼はスタートしており、そこには重要な〈音風景〉がみられる。たとえば、『年中行状記』での記述をみれば、この日の前までは、

二月朔日 晨朝鐘 神樂
十一日 涅槃會御供五合拾銅 開山會之通、行全寄ル
十五日 晨朝鐘
同日 涅槃會出仕鐘五ツ時、一山出席、差（着）座 勤行 涅槃禮讚 安樂品 遺教經明治三十
初ル 自我偈 圓頓者 回向終而出堂
廿八日 晨朝鐘 神樂
三月朔日 晨朝鐘 神樂
十五日 晨朝鐘 神樂
十九日 出仕鐘五ツ時 金色堂今ハ曼供ハ金色院ニ於テ修ス、終テ金色堂ニテ自我偈一卷、念仏等
唱フ、オマカナヘアリ
基衡公御忌日 一山出席 差（着）座 勤行 法華懺法今ハ合曼ヲ修ス自我偈 圓頓者
回向 終而出堂⁽⁹⁾

といった簡単な記述でまとめられている。ここでのトピックは、涅槃會や基衡公御忌日といった法要は特別だが、それ以外はだいたい2週に1度（毎月朔日・15日・28日）、朝の6時頃勤行を知らせる鐘が鳴り、神樂が奏されること、念仏等読経の音が認められる程度である。ところが、これに続く記述から、〈音風景〉が一変する。すなわち、

白山宮御神事

牛（午）日ヨリ別行 同日 白山大般若轉讀、四ヶ度之内二

同日 晨朝鐘 神樂毎朝 出仕鐘八ツ時 神樂毎晩 白山宮法樂終而拜殿一山出席、結衆下ヨリ拾入田樂衆、法樂落而、御一馬吟味披露兼而之通病氣之者有之時、役院披露、初乘無之時ハ一山ヨリ御頼、其段御一馬被相出衆江役院ヨリ口上兼而之通、

式三番後役願有之時ハ吟味披露申達、後役 役院ヨリ中渡候事、後役工讀リテモ七ヶ年本役、後ハ御頼其外諸用終而御立断退出、⁽¹⁰⁾

この日から、それまで2週間に1度だった朝の鐘と神樂という〈音信号〉が、毎朝の鐘、毎朝毎晩の神樂という〈音信号〉へと変化することになる。この日は一山の僧侶が白山宮拜殿（長床）に集まり、結衆（得度後21ヶ年以内の僧）から下位の10人を田樂衆として選び、法樂（法

要を終える際のお経や声明の誦唱や奏樂)を唱えた後、御一馬の稚児が吟味・披露される。さらに、翌日は、「未日 晨朝鐘 神樂、晚出仕鐘 神樂 一山出席 田樂各如前夜」とあるように、朝晩の神樂だけでなく、夜に田樂も続けられ、これが未日・申日・酉日・戌日・子日と繰り返される。ちなみに、『関山中尊寺歳中行事』の当該箇所は、「三月末之午ノ日開闢、前行二七ケ日、毎日晝七ツ時鳴鐘、一山出勤、於長床誥衆田樂奏之、八日目ヨリ内七日ト云、夫ヨリ朝暮田樂奏之、～(中略)～、右丑之日ヨリ毎朝五時誥衆出勤、田樂奏之、辰日・巳日如前、誥衆出勤、法樂 普門品 心經 諸真言 内七日朝法樂後笠割」⁽¹¹⁾となっており、「内七日」と呼ばれる前行8日目にあたる翌・丑の日から、毎朝・晩田樂が奏され、また法樂として普門品・般若心經・諸真言が唱えられ、笠割など田樂関係の道具の分配が行われることがわかる。ちなみに、ここでは、田樂のみで「神樂」という語はみえないが、より詳しい『年中行状記』での記述をみれば、

丑 日 [内七日] 晨朝鐘 神樂、結衆出席、式三番答役院江言上、田樂終而、張笠・長刀・烏帷(帽)子、[△印御神酒料] 田樂道具御内陣ヨリ行全運役、⁽¹²⁾

とあり、神樂と田樂を別物として扱っていることがわかる。また、田樂道具についても、種類と数、さらにどの寺院が用意するかについて細かく記されており、笠(日光・月光笠2、張笠6)、持物(長刀5、梵天1、行燈4)、楽器(笛3、編木3、太鼓3、小鼓1)、装束(田樂烏帽子・腰帶・外袴・ヤロウ髪・水干各8)が内陣から行全⁽¹³⁾によって運ばれ、各役の担当者に渡される。

翌・寅日もその翌・卯日も朝の神樂、夜の田樂の練習は続けられるが、辰日になると、それまでの神樂・田樂に加えて、朝は、結衆らが、錫杖、普門品、心經、諸真言といった法樂を誦した後、路舞の練習に入る。夜は、田樂が終わったあと、翌日の「試樂」即ちリハーサルについてのタイムスケジュール(時鐘)や、笛担当、大・小鼓担当、式三番の開口・祝詞・若女・老女それぞれについての後見役について、担当や持物の確認が行われる。

祭礼本番の前日・巳日は、朝の鐘で神樂が奏された後、結衆が出席して御経誦誦、路舞を行なっていったん退出したのち、一番鐘(八ツ時～14時頃)で仕度、二番鐘(八ツ半～15時頃)で宿坊(寄合所)に詰め、三番鐘(七ツ時～16時頃)で拝殿へ向かう。白山別当修験周明院の祇宜による神樂ののち、一山の僧侶が出席し、五條を着て勤行が行なわれる。この四智讀・諸天讀・錫杖・普門品・鏡鉞・般若心經・諸真言・一字金輪咒といった法樂が終わった後、田樂に使う楽器、すなわち編木、太鼓、小鼓の確認が行われる。確認後、これら笛・一ノ太鼓・二ノ太鼓・三ノ太鼓・三ノ編木・二ノ編木・一ノ編木・小鼓と幣拂が真ん中に置かれ、幣拂と編木の担当は直立、太鼓と小鼓の担当は内へ入って仕度し、出てきたら、一山全員が列席する中、田樂衆(楽人8人+笛2人)によって田樂、路舞が行われる。次に、古実式三番(開口・祝詞・若女・老女)が中老(得度して22ケ年以上でそこからまだ7ケ年経っていない僧侶)によって舞われたのち、各装束は集められ各後見の役院へ収められ、今回御一馬の稚児を務める者を出した寺院が饗応する。その後、翌日の時鐘等を確認したら退出となる。

1.2. 白山社祭礼当日の音風景

祭礼本番当日、午ノ日は、一番鐘(明六ツ時～6時頃)で仕度、二番鐘(六ツ半～7時頃)

で宿坊に詰め、三番鐘（五ツ初刻～8時頃）で、各自それぞれの決められた僧衣を着て白山宮へ参向する。白山宮の扉を開いて、惣別當代が供え物を捧げ（獻供作法）、御本地供（白山御本地十一面観音供）、普門品・般若心経・諸真言の読経に続き、本山派修験周明院の祢直による奉幣、御神酒頂戴が行われた後、次の時鐘スケジュールを確認してから堂を出、経蔵・金色堂・開山堂・弁財天を参詣する。その後、一番鐘（四ツ時～10時頃）で装束をととのえ、二番鐘（四ツ半～11時頃）で寄合所から金色院に移り、三番鐘（午初刻～12時頃）で一同金色院を出発、白山社へ向かう。この途中、御一馬の稚児と結衆が金堂跡（現在の金色堂の前あたり）に詰める。次に白山社の前の広場で獅子舞が奉納され、さらに金堂跡でも舞われる。その際、周明院の祢直山伏が神主の装束で、御幣をささげ持ち、獅子の後に付き、さらに山伏が5～6人が付き添う。この金堂跡での獅子舞後、山伏たちは獅子とともに御一馬の前に立ち、白山社へと列を作って移動を開始する。この供奉行列の次第は、『年中行状記』によれば、

小人拂兩人・御足輕兩人・箱・鑓・張笠・田樂笠・幣拂・一ノ編木・二ノ編木・三ノ編木・鞆一ノ太鼓（鼓）・二ノ太鼓（鼓）・三ノ太鼓（鼓）・日光月光笠・兎笠・神馬金色院寺役、人共二馬一七ヶ日別行口取白鳥差（着）兩人、御銚行全・兎朱蓋別當代金色院・惣衆（列）二行、笛・田樂衆二行、跡御足輕兩人、⁽¹⁴⁾

とある。神馬に乗る七歳の稚児は、剃髪し、鬘帯・着付衣装 錦上着・長絹・石帯・指貫を着用し、両腰の後ろに造り物の葎の葉を差し、四方に五色の紙で七五三飾りをつけてっぺんに造花を立てた籠造りの笠を被る。神馬は馬具と厚手の紬が懸けられ、御口取と御手綱取の兩人と結衆は、張笠に太陽と月の飾りを立てて被り、水干・石帯・括袴・脚半といういでたちである。また供奉の2人、結衆のうち6人は張笠に造花を立てて被り、衣装は、御手綱取と同じで、長刀・太刀・兎の作り物を携え、神馬の後に続く。素絹五條を纏った一和尚（結衆の高臈の三役院の一。知足院）が先に立ち、金堂跡から白山社の神前まで乗り入れる。足輕2人が拝殿前の二の鳥居を越えると、長刀はそこで打ち捨てられ、拝殿に面した通りでは太刀が同様に捨てられる。笠も白山社前の庭にて脱ぎ捨てられる。神馬は戻され、稚児は神前に入り御神酒を受ける。結衆は稚児の後について神前へ上り、高い声で秘密心経一巻を読誦し、御神酒を受けたのち、金堂跡へ戻る。この間に拝殿で周明院祢直によって神樂が二番舞われる。金堂跡で、附髪・烏帽子といった田樂装束や樂器類の仕度をととのえた結衆（長刀2振、小人拂2人、足輕2人、笛2人、幣拂、一ノ編木、二ノ編木、三ノ編木、三ノ太鼓、二ノ太鼓、一ノ太鼓、小鼓）は、再び庭を通過して、白山宮へ移動する。一行は拝殿に上り、田樂・路舞を奏する。次に、笛が神を招来する石笛の音を模したとされるヒシギを吹き、田樂衆の上役によって、大小三段の舞が舞われる。次に式三番へと進み、中老によって開口、祝詞、若女、老女が舞われる（〈音風景〉的には、祝詞と老女での「大小神子拍子打」と若女での鈴の記述が目される）。この式三番後、神事能興行が終わると、一山が集まり翌日の時鐘について申し合わせが行われ、退出となる。

祭礼二日目の翌・未日では、明け六ツ半（7時）の一番鐘で仕度し宿坊に詰め、朝五ツ（8時）の二番鐘で老分と結衆が前日同様の装束をととのえ、白山社拝殿へ詰める。全員が揃ったところで、路舞が舞われ、それを役院が見届ける。その後、前日午日と同様、拝殿を出て堂宇を廻り、三番鐘で、小釈迦堂、金堂跡、赤堂、弁財天、千手堂で、路舞を舞い法樂（般若心経）を唱える。山王宮では、笠を被って田樂を奏し、役院が見届けた後、皆で勤行し、御本地供・錫杖・般若心経・諸真言を唱える。御神酒頂戴の後、次の堂へ向かう。東照宮、愛宕宮では路舞、

峯薬師堂では、山王宮と同様、田楽と、勤行で錫杖・普門品・心経・諸真言を唱え、御神酒頂戴。さらに大日堂と阿弥陀堂で路舞を行う。一同は宿坊の棧敷に着座し、式三番の担当役は拝殿に入るが、役院より下位の僧たちは金堂に残り、前日同様、庭通りへ田楽衆を引き揃え、鑓二筋、足軽、前後二人、田楽衆一行が拝殿に入り、田楽を行い、役院がそれを見届ける。その後、式三番が前日と同様に行なわれ、大小笛はいずれも古例に則って奏される。その後神事能が終わってから、田楽道具が回収され、笛2管、烏帽子、腰帯8人前、編木3筋、太鼓3つ、鼓1つを確認し、行全がそれらを白山社へ運ぶ。拝殿では、一山が集まり、翌日・申日の山王講の時鐘を確認した後、鐘の音を合図に退出する。

2. 田楽 ～白山社祭礼より失われた音風景～

以上、みてきたように、中尊寺における日常の〈音風景〉は、〈基調音〉としての読経の声、〈音信号〉としての時鐘や神楽、そして、音象徴としての田楽と捉えてよさそうである。特に『年中行状記』の記述をみるかぎり、白山社祭礼は御一馬そのものよりも、毎朝・毎晩行われる田楽にスポットライトが当てられていると言える。しかし、田楽、神楽については今日復興されておらず、情報が少ない。そこで、前掲論考⁽⁵⁾で本田安次が報告する内容についても、以下少し内容を紹介しておこう。昭和六（1931）年4月の段階で実際に本田が観た祭礼1日目は、以下のようなものである。すなわち、本殿前の能舞台で祭式・玉串奉献ののち、舞台を仏式に飾って、4人の僧が登場、鐘を打ち鳴らし、般若心経他を唱え、印を結んで祈禱を行なう。次に「太々神楽」であるが、鈴と扇を持ち、垂纓冠・直面・狩衣・白袴を着用した僧が太鼓の囃子に併せて4つの四角を踏んで舞った。（もともとは太鼓打が「八雲立つ」以下4つの神歌を歌ったらしい）。次に、1頭3人で担われ、踏み鎮めする獅子舞。次いで、故実舞（式三番）である。これを務める囃子方は、笛が一和尚（席次4番目）、大鼓が二和尚（席次5番目）、小鼓が三和尚（席次6番目）の役とされ、僧たちにとって重要な役どころとされた。そして最後が神事能である。今日「お山流」とも呼ばれる現行の能は、シテが喜多流、ワキが高安流、狂言が和泉流となっている。社伝によれば、猿楽好きの豊臣秀次と伊達政宗が天平一九（1591）年に、中尊寺で猿楽を鑑賞したとのことだが、それまで伝承されていた「大和がかり」と呼ばれる古い「田楽の能」を、政宗が、国家太平祈願のため、仙台藩お抱えの喜多流に替えさせたとされている。前掲『平泉志』からの引用にもあるように、白山宮は、嘉永二（1849）年正月8日の火事で全焼し、諸道具や本地仏だけでなく、多くの楽器や能道具（能面61面、能道具30品）を焼失した。前述のように、御一馬については、明治の神仏分離令以降行われていないが、昭和二五（1950）年から始まった現行の春の藤原まつりでは、別表（57頁参照）に部分的に示したように、5月4日・5日に「春の御神事」午・未の日が当てられ、古実式三番と神事能はなされている。献饞行列と獅子舞は復活したが、田楽、太々神楽は廃絶したままである。古くから「延年」を伝承してきた毛越寺との違いはやはりこの大火事の有無によるのであろう。わずかに、小鼓、編木3、花笠3、衣装、帯のみが残されている。また故実舞の面のうち、現存する若女の面裏には「正応四年三月廿四日」という刻印がみえ、少なくともこの故実舞が鎌倉時代（正応四・1291年）までは遡れることがわかる。音的に興味深いのは、小鼓であり、皮の部分が紙でできていることである（田楽の際、水干の下で腰に結びつけられた太鼓が叩かれたが、これは現存しない。しかし、本田によれば、毛越寺延年・田楽躍の太鼓のように、これ

も同じく皮は紙製あったろうと推測される)。中尊寺円乗院蔵文書「古実式三番手数」では、この鼓打のことを「シッテン」と称しているが、毛越寺延年の田楽躍では鼓を「瑟丁伝(シッテイデン)」と称している。また白山社祭礼の「ロウ舞」の型付は、本田によれば、毛越寺延々の路舞と同様であったり、白山社祭礼の田楽と毛越寺田楽の編成の違いが、「幣祓」か「銅鉞子」かの違いだけであとは、ともに太鼓3・編木3・笛2・鼓(瑟丁伝)の計10名で構成されていること、そして、その衣装も、胡桃の樹皮で網代に編んだ笠や水干・脚半を着用するなど、共通点が多い。毛越寺の田楽は「粧」「散」「行道」「立法」「大水車」「中八返」「小水車」「鳥ばみ」の8曲が残るが、白山社の方は、いろいろあっても名称がなく、最後の曲だけが「鳥啄(とりばみ)」とされる。

そもそも田楽とは、田植えを囃す田囃子に用いる腰太鼓(田鼓)のことを指していた。たとえば、『榮花物語』巻十九「御裳ぎ」で治安三(1023)年5月、藤原道長が土御門殿で大宮・藤原彰子のために催した田植行事に関する具体的な記述の中に、

又田楽といひて、怪しきやうなる鼓腰に結いつけて笛吹き、さゝらといふ物突き、さまへへの舞して、あやしの男ども歌うたひ、心地よげに誇りて、十人ばかりゆく。そが中にもこの田鼓といふ物は、例の鼓にも似ぬ音して、ごぼへへとぞ鳴らしゆくめる。⁽¹⁵⁾

とあるように、この時代は紙張りの太鼓だったと推察される。まだ、腰鼓、編木、笛、歌、舞といった構成だったこの時代から、嘉保三(1096)年6月14日の祇園御霊会に際して始まった、いわゆる「永長の大田楽」になると、その〈音風景〉は喧騒へと拡大する。大江匡房の『洛陽田楽記』に、

永長元年之夏、洛陽大有田楽事。不知其所起、初自閭里、及公卿。高足一足、腰鼓振鼓、銅鉞子編木、殖女春女類、日夜無絶、喧嘩之甚、能驚人耳。諸坊諸司諸衛、各為一部、或詣諸寺、或満街衢。一城之人、皆如狂焉。蓋靈狐之所為也。其装束尽善、尽美、如彫如琢、以錦繡為衣、以金銀為飾。富者傾産業、貧者跂及之。⁽¹⁶⁾

とあるように、高足・一足といった飛び跳ねる芸、腰鼓・振鼓・銅鉞子・編木といった打楽器、殖女・春女(「農事に携わる女性」の囃す声)、さらに激しい喧嘩といった騒音が日夜絶えることなく続き、衆人の耳を驚かせた。つまり、そこにある〈音風景〉は「ノイズ」という語で括れよう。

しかし、ここで、「平泉諸寺祭礼曼荼羅」右幅に描かれた「御一馬」の行列を思い出そう。白山社拝殿の前で輪になって躍っているのは田楽衆であるが、円乗院蔵文書によれば、その田楽躍の順序は、編木衆道行、太鼓衆道行、一ノ編木化粧、二ノ編木化粧、三ノ編木化粧、早田楽、幣拂(祓)化粧、太鼓衆・鼓(シッテン)化粧、となる。つまり、移動中に躍りをし、早田楽が奏でられていることになる。現在、毛越寺延年に伝えられている前述・田楽躍も、本来は、春の行事としての野外群舞であり、「庭の舞」「場躍(にわおどり)」と呼ばれていた。それはこの田楽躍が粧坂の粧部屋(『平泉志』巻之下によれば⁽¹⁷⁾、正月摩多羅神祭=常行堂二十日夜祭の日、田楽人の楽屋がこの坂上にあつた)から躍り始められ、大泉ヶ池を廻って金堂円隆寺の前庭へ至り、そこで改めて躍られたことによる⁽¹⁸⁾。つまり、田楽躍は、本来、庭という

固定した場だけでなくその移動中も舞われているという点が重要である。

それを視覚的に確認するには、「平泉諸寺祭礼曼荼羅」のように、移動する祭礼が描き込まれている社寺参詣曼荼羅（たとえば、京都祇園祭での御旅所＝大政所への神輿渡御や長刀鉦・伯牙鉦の巡行や、御旅所内という固定された場ではあるが湯立神樂が描かれた「祇園社大政所絵図」など）よりも、平安末期、後白河法皇の命によって作られた『年中行事絵巻』の方が参考になる。たとえば、永長の大田楽と密接に関係する巻九・祇園御霊会（6月7日～14日）の冒頭には、貴族屋敷の前で中門口を演じる田楽の一座が描かれている。これは14日の還幸祭、御旅所から列見所へと移動中の場面である。藺笠に水干姿の田楽法師たちが横笛を吹き、太鼓を両手に持った撥で叩き、編木を鳴らしている（中には、鼓を宙に投げ上げ曲打ちをし観衆の注目を浴びている者もみえる）。さらに行列は、乗尻4～大幣2～巫女（騎馬・風流傘）～巫女（騎馬・市女笠）～舞人（王の舞・振鉦）～荷太鼓（鉦鼓つき）～師子舞（周囲に笛1、抱持形太鼓2）～四神鉦（劍鉦or幸鉦）～師子舞（周囲に笛1、抱持形太鼓1）～神輿（牛頭大王。鳳輦。興丁は皆鳥兜）～巫女（騎馬・市女笠）～巫女（騎馬・風流傘）～神輿（婆利采女。葱花輦。興丁は鳥兜）～田楽衆（小鼓1・胸に太鼓2・笛1・編木1。全て騎馬）～神輿（八王子。鳳輦。興丁は鳥兜）～宮主（騎馬・束帯）～駒形稚児（騎馬）～細男6（騎馬。笏拍子1・鼓1・笙1・笛1・銅鉦子1・編木1）と続く。つまり、神輿渡御中も、観衆の耳を惹き付けるように多様な音が出されていたということになる。翻って、前掲の菅江真澄の紀行文や『平泉雑記』『平泉志』、あるいは『年中行状記』『関山中尊寺歳中行事』を見ると、御一馬の行列における、まさに音の担い手である獅子舞や田楽衆が、金堂跡から白山宮拝殿までの移動中に実際音を出していたかについては何の記述もない。もちろん、拝殿内だけでなく、金堂跡、拝殿前といった野外の場でも音が出されていたことは言を俟たない。しかし、その移動中、たとえば田楽衆の笛方も太鼓方もみなただ楽器を携えていただけで、音を出さなかったののだろうか。少なくとも、「平泉諸寺祭礼曼荼羅」右幅上に描かれた田楽衆の様子は、『年中行事絵巻』の田楽衆ほど賑やかにではないが、音を出しているようにも見える。

この問いについて一つの手がかりを与えてくれるのは、若い頃から神事能に携わり、祭礼の継続に力を傾注してきた関係者の一人、中尊寺北本坊薬樹院の北嶺亮詮（1877-1959）より本田安次に宛てられた書簡内にある、昭和六（1931）年以前の白山宮祭礼についての以下の記述である。すなわち、

四月初午、七歳になる中尊寺一山寺院の、将来住職となる小児が神粧して白馬に乗り、白山宮に詣る。是を一馬の祭といふ。一山の僧侶は装束して、其の格式により行列し、午前五時に出勤し、中年より小僧までは三時に出勤し、田楽舞を勤む。六時に、金堂跡に、神装せる小児白馬に乗り、式を初む。社家宮に参り、獅子舞を勤む。先達中年（一和尚ト申）僧、田楽装束し、日月天を付けし陣笠をかむり、長刀持ち、竹にて作れる兎を持つ。残りの僧侶はクルミの木にて作れる花笠をかむり、長刀、兎を持つ。同音にて声を立て、走り、一の鳥居にて兎を捨て、小児馬は走りて神前に至り、神酒を受け、其後は中尊寺本坊ジャツキに居る。田楽の僧侶等は神前にて般若心経を誦誦し、神酒を受け、走り、山王堂、一山の各堂をめぐる。白馬なくは悪しとせり。中臈以上の僧侶は、能楽堂にて大般若経を転読し、小児の参詣と同時に転読は終る。終って法花八講の道場を能楽堂にかざり、講論儀をなす。右法要終って道具を取片付け、田楽僧入り田楽を申。右終って故実舞。次にお能。二日間同前、初日は白山宮、二日は一山各堂の祭典、三日申日は山王権現の論儀を行ふ。⁽¹⁹⁾

ここでのポイントは、下線を付した「同音にて声を立て、走り、一の鳥居にて兎を捨て、小児馬は走りて神前に至り」という箇所である。つまり、移動中、楽器音はないが、意図的に合わせた声が響かせられている点である。現行の祭礼では、式三番や神事能といった固定された場はあっても、御一馬という移動する行事は消えている。しかし、御一馬が「神霊の憑坐（よりまし）」として華やかに飾り立てられ、また白山社の鳥居をくぐると長刀や兎が捨てられるということは、長刀や兎の意味は移動中にこそ見いだされることになるだろう。実は、御一馬や田楽が継承されなかったその理由を知るためには、なぜ平泉の白山社祭礼に御一馬があり、それが一山最大の年中行事だったのかという基本的な問いに戻る必要がある。

3. 一つ物と馬長

そもそも「御一馬」とはどのようなものであろうか。一般に「御一馬」は「一つ物」というカテゴリーに含まれる。たとえば、民俗学者・福原敏男によれば⁽²⁰⁾、「一つ物」とは「祭礼に出る特別な衣装の子童や人形」のことをいい、「派手な装束・被り物・化粧などの行粧で、特別な芸はなく、肩車や騎馬で行列に加わり、特別な役割を担当する事例が多い」とされる。また、それは、歴史的には「平安後期の畿内の祭礼において、当時流行していた馬長童の容姿の影響を受け、田楽や流鏝馬などの祭礼芸能に組み入れられ」たものであり、「祭礼の渡物において、山鳥の尾をつけるなど装飾的な目立つ出で立ちで人目を驚かす風流であった」とされる。さらに、福原は「ひとつ物考」という論考において、白山社祭礼の御一馬がなす所作に関して、白山社拝殿前で、稚児が馬を下り、その笠に付けられた造花を四方に投げ捨てる儀礼が、春日若宮おん祭や宇治神社大幣神事で一つ物が行なう所作と共通していることを指摘している⁽²¹⁾。後者は、宇治神社例祭で神輿三基の渡御の還幸（5月8日。ちなみに御旅所への神幸は4月7日）に先立ち行われる神事であり、1,600枚の小さな白幣を垂らした巨大な幣の後に、同じく笠に白幣をたくさん垂らした笠を被った白衣の一つ物が続く。

日本中世史学者・永島福太郎によれば⁽²²⁾、「一つ物」の初見は、藤原（中御門）宗忠が宇治鎮守明神離宮祭見物をしたことを綴った、彼の日記『中右記』長承二（1133）年五月八日条に見える「巫女馬長一物田楽散楽如法、雑芸一々」ということになる。この続きには、競馬も出てくるが、巫女、馬長、御一物、田楽、散楽そして雑芸と、春日若宮祭礼との類似も指摘される（ただし、神輿渡御は春日若宮にはない）。宇治鎮守明神あるいは宇治離宮明神とは、現在の宇治神社と宇治上神社の両神社を合わせた呼称であり、宇治平等院建立ののち、宇治上神社はその鎮守として位置付けられた。この宇治鎮守明神離宮祭とは前掲の「大幣神事」のことである（近世以後呼称が「大幣御方神事」となった）。永島によれば、春日若宮祭礼において、田楽が大幣（現在は五色御幣）を捧げ持ち、祭礼風流では祝役を務め、いわば風流の主役であった。よって、「一つ物」とは「最重要な唯一の物」の意であり、大幣自体、「一つ物」に附属するもので、田楽が供奉する形だったと推測される。さらに永島は、こうした「一つ物」などから考えると、春日若宮祭礼は宇治離宮明神祭に倣ったものと考え、後者は祇園御霊会（祇園祭）を模したものと指摘する。たとえば、『中右記』大治二（1127）年六月十四日条には、白河・鳥羽両上皇も見物した祇園祭が以下のように記されている。

或晴或陰、時々小雨、祇園御霊会、四方殿上人、馬長童、巫女種女田楽各数百人、此外祇園所司僧、隨身数十人兵供奉、舞十人、使乘唐鞍、凡天下過差不可勝計、金銀錦繡風流美麗、不可記尽、

ここでの「馬長童」とは宇治離宮明神祭での「馬長一物」であり、この「馬長童、巫女種女田楽各数百人」が祇園祭の中心であったとされる。それゆえ、永島は宇治離宮明神祭に祇園御霊会の御霊信仰も共有されているとする。

実際、前掲の『年中行事絵巻』巻十二における祇園会神幸当日の馬長一行の描写をみると、大幣（水干）1～馬長1（雉の羽根と菖蒲の花がついた綾蘭笠）～口取2（左は鳥籠、右は舞楽の安摩の蔵面をそれぞれ付けた風流笠）～供奉の雑色4（それぞれの笠の上には、的と折れ矢、亀甲の上に巖の蓬萊山などの造り物がみえる）～長刀2（笠に造り物）～獅子舞3～楽人たち（太鼓2、笛3。蘭笠を着用している者と烏帽子の者が混在）～大幣8～鉢1～舞人（舞楽の散手）1～荷太鼓1～神輿1～大幣8（大笠がついたものも含む）～枯木のようなもの～神輿1（神輿は計5基）…と続く。

さて、以上のように、永島は、「一つ物は長承保延の交（1130年代）、宇治離宮明神祭や春日若宮祭で発祥伝播したもの」あるいは「祇園御霊会（六月会）の馬長童が同類として迎えられたもの」という仮説を立て、そこから全国に伝播したと考えた。ただし、祇園御霊会の馬長は50騎以上を数えるが、「一つ物」という呼称ゆえ、童子は少なかったとされる。一方、前出・福原敏男は、「馬長＝一つ物」説に異を唱える。その根拠としては、一条兼良（1402-1481）の『年中行事大概』祇園御霊会の条の「むかしは人長とて、馬に乗せたるひとつもの」という記述や、北朝の公家・中原師守の日記『師守記』巻二十三・貞和三（1347）年六月十一日条の、「今日月次仲今食延引、依武家産穢天下偏満也、今日天下燭燦時、祇園御霊會馬長等事」という記述、あるいは月食による天下触穢の昔の事例、すなわち天永元（1110）年六月十四日の祇園御霊会の時は「一物十列之類不見、是天下傲氣故軟」、すなわち一つ物と十列（神馬）が出なかったことが記されていることが挙げられる。つまり、「一物」と「馬長」が使い分けられていることが、それらが同じではないことの理由になるとされ、最終的に、「一つ物は平安末期から中世にかけて、畿内寺社領の地方荘園の鎮守社祭礼芸能として、地方に伝播していった。あるいは、天台宗寺院の教線拡張による日吉山王系の芸能構成の一つとして伝播していったものも数多い。始原の一つ物は京都祇園会を中心とする馬長の行粧であり、各地へ伝播していった一つ物も多くは馬長姿の一つ物であった」と結論づけられる⁽²³⁾。

こうした先行研究をふまえて、平泉・白山宮祭礼の御一馬に戻るならば、開祖が円仁とされ天台宗東北大本山である中尊寺にも、畿内から「日吉山王系の芸能構成」および「鎮守社祭礼芸能」が伝播したと考えてもよからう。また、芸能史家・山路興造のいう2分類（後述）では、中尊寺各院に伝わる江戸時代の文書の内容を考えるかぎり神社側の祭礼であり、馬長的なものがその中心とされていたという点では信仰者側の祭礼と考えられる、白山社祭礼の御一馬はそれとどうかかわるのであろうか。

4. 御霊社と平泉鎮守社の関連

『吾妻鏡』文治五（1189）年九月十七日条にある、いわゆる「寺塔已下注文」（「文治注文」）の項には、

一 鎮守事

中央惣社。東方日吉。白山両社。南方祇園社。王子諸社。西方北野天神。金峰山。北方今熊野。稻荷等社也。悉以模本社之儀。

一 年中恒例法会事

二月常楽会 三月千部会一切経会 四月舍利会 六月新熊野会・祇園会 八月放生会 九月仁王会
講読師請僧。或三十人。或百人。或千人。舞人卅六人。樂人三十六人也。⁽²⁴⁾

とあり、中尊寺の南方鎮守として祇園社が勧請され、さらに六月に祇園会が行われていたことがわかるゆえ、祇園御霊会の「馬長」が白山社祭礼の「御一馬」の淵源であることは確かであろう。白山社祭礼については、さらに京都伏見稻荷社の稲荷祭の影響も考えられうる。そもそも、「初午」とは稲荷社の縁日であり、稲荷社も中尊寺北方鎮守の一つとして勧請されていたのは上の引用にある通りである。稲荷祭自体の式日は、神幸祭が陰暦3月・中の午の日、還幸祭が陰暦4月・上の卯の日となる。前掲『年中行事絵巻』巻十一はこの稲荷祭における馬長の行列を描いている⁽²⁵⁾。御幣をもった大童子の後に、2名の口取（藺笠の上に竜胆の折り枝）そして馬長（綾藺笠の上に雉の尾羽根。水干着用で、腰に薄花を差す）が来る。ここでの馬長は一人ではないが、腰に薄花を差ししたりするのは御一馬と共通する。

科学史家・吉田光邦によれば⁽²⁶⁾、馬長は御霊会系の祭に限られるとされるが、では、永島も示唆していた御霊信仰との関係はどのようであろうか。前掲・山路興造によれば⁽²⁷⁾、天皇の命により祇園御霊会の祭礼行列で蔵人町の童部に風流を競わせはじめたのは、11世紀半ばである（源俊房『水左記』承暦四（1080）年六月十四日条）。つまり官祭として始められたわけだが、11世紀末期には、風流の馬長童を出すことに固定されてゆき、たとえば、『中右記』長治二（1105）年六月十四日条に「女房達見祇園御霊会、～（中略）～、而間田楽与馬長童相論出来」とあるように、さらに田楽がそれに加えられる。山路は、祇園御霊会における祭礼形態に注目し、主催者である神社側の祭礼形態と信仰者側の祭礼形態との区別を主張する。前者の中心は神輿渡御であり、その典型は前述の『年中行事絵巻』巻九の祇園御霊会でみられたような行列になる。そこでは、「巫女・王の舞・師子舞・田楽・細男」を1セットとした祭礼芸能が不可欠で、春日若宮祭などでは、これに猿楽や流鏝馬が加わる構成になるとされる。それに対して同じく前述『年中行事絵巻』巻十二に描かれた祇園御霊会の馬長の行列は、貴族など信仰者集団側による祭礼行列の典型で、そこには素人による歩田楽も加わった。つまり同じ『年中行事絵巻』中に巻を分けて祇園御霊会が描かれている理由は、これら2つの祭礼形態があったからということになる。

前出『師守記』での記述や、『中右記』寛治六（1092）年六月十四日条での「十四日、祇園御霊会、無馬長童部、依天下大穢也」などを見るかぎり、馬長や一つ物と天下触穢には関連がある。そもそも、御霊会は、平安京という「都市」とともに誕生した。つまり、多くの人間が集まる都市社会にとってある意味不可避な不衛生に起因する疫病流行が、政争や戦乱等で非業の死を遂げた者の怨霊と重ね合わされ、それら怨霊を鎮め、逆に鎮護の神として祀ることによって疫病を退散させるという御霊信仰に由来する信仰であり、祇園（八坂神社）の場合は、行疫神である牛頭大王が祇園精舎の守護神として祀られている。いわゆる「中尊寺供養願文」においては、祇園精舎の鐘をイメージさせる二階鐘樓に懸けられた廿鈞の洪鐘について、

右、一音所覃千界不限，拔苦與樂，普皆平等，官軍夷虜之死事，古來幾多，毛羽鱗介之受屠，過現無量，精魂皆去他方之界，朽骨猶為此土之塵，每鐘聲之動地，令冤靈導淨刹矣。⁽²⁸⁾

と記されている。ここで、この鐘の音が、官軍夷虜これまでに恨みをもって斃れた人間、そして鳥や魚までも含めて全ての冤霊（怨霊）を鎮め浄刹（浄土）に導くと書かれているように、そこには御霊信仰が底流している。平安京と同じく人工的「都市」であった平泉に、こうした都市的信仰が導入されるのはきわめて自然なことであり、それは祭礼芸能についても同様であったと考えられる。

これに関連して、平泉史研究の硯学・菅野成寛は、平泉へ勧請された祇園・北野・稲荷の各本社に通底するのは御霊神的性格であることを指摘した⁽²⁹⁾。菅野は、日本中世史学者・伊藤喜良が四角四堺祭について、都を淀川から遡ってくる疫病神・穢れ・怨霊から防ぐための一種の結界を張るためのものであったとしていること⁽³⁰⁾をふまえ、それぞれ南・西・北の方位に配された祇園・北野・稲荷という平泉の鎮守社が北上川や奥大道といった水陸の大動脈から遡ってくる疫病神・穢れ・怨霊から「都市」としての平泉を「聖・浄」に保つための機能をもっていたとする。京が賀茂川・鴨川・桂川・天神川などによって圍繞されているように、平泉は、北は衣川、東は北上川、南は太田川で囲まれた地に作られており、地理的にもそれは首肯される。祇園社と北野天神社が御霊・怨霊に関係した社であるのは言を俟たないが、稲荷社についても、『中右記』嘉保元（1094）年四月九日条に「今日稲荷御霊会也」とあるように、稲荷祭と御霊会とは結ばれうる。また、菅野は、北方鎮守として今熊野社と稲荷社がセットで勧請されたことについて、京から紀伊の熊野詣に行き、その帰途、必ず稲荷社に参詣し護法送りをする慣習があったことを引き合いに出している。

また、『年中行事絵巻』巻十一で稲荷祭の馬長の行列が描かれていたのは前述の通りで、そこでの馬長は当然白山社祭礼の御一馬に結びつく。たとえば、前掲『年中行状記』の御一馬の行列次第の中に「口取白鳥差（着）兩人」とあったが、稲荷社の本社、伏見稲荷大社の創建に関しては、吉田兼俱『延喜式神名帳頭註』（文亀三・1503年）に『山城風土記』として、

風土記云。稱伊奈利者。秦中家忌寸等遠祖伊侶臣秦公。積稻梁有富祐（裕）。乃用餅爲的者。化白鳥飛翔居山峯生子。遂爲社。其苗裔悔先過而拔社之木殖家。禱命也。⁽³¹⁾

とあり、稲荷社と白鳥とは切っても切れない縁がある。また、御一馬の稚児は、腰に葦の葉を差すが、それは、護法送りをした者が腰に稲荷山の杉の小枝（「しるしの杉」）を差して戻ること想起させる。たとえば葉室光俊の「きさらぎやけふ初午のしるしとて稲荷の杉はもとつ葉もなし」（寛元二・1243年成立の『新撰和歌六帖』第一・歳時・四〇）のように、初午と「しるしの杉」とを関連させて詠み込んだ和歌は多く、「しるしの杉」といえば稲荷社や初午がすぐ連想されるほど人口に膾炙していたという。中尊寺の月見坂は樹齢三百～四百年の大杉の並木が両側に続くので有名だが、これは江戸時代に伊達藩によって植えられたもので、それ以前はどうであったかはよくわからない。しかし、「平泉諸寺祭礼曼荼羅」両幅を見れば、そこに描かれている樹々はすべて杉であり、特に左幅では、杉木の配置はほぼ神社の周囲となっている。

では、肝心の白山社との関係はいかようであろうか。白山信仰についての基本資料といえる『白山之記』（長寛元・1163年成立?）に、「奥州秀衡五尺金銅像奉治鑄之、小白山御躰長滝寺竜明房、勸進五尺金銅像」⁽³²⁾と、天台宗・白山中宮長滝寺に藤原秀衡が五尺の金剛像を治鑄・奉納したという記録があることから、その関係は浅からぬと考えられる。特に「平泉」という地名が、白山三馬場の一つ越前馬場として禅定道の起点にあり、巨大な宗教都市であった奥州・平泉という地名も霊応山平泉寺に由来するとも言われる（確かに現在のJR平泉駅あたりの地名は白山の古称と同じ「しらやま（志羅山）」であり、その地名を苗字とした家も奥州平泉にはある）。平泉寺白山神社に伝わる天文六（1537）年の『霊応山平泉寺大縁起』には、秀衡が、寿永二（1183）年に白山へ十一面観音像と六道地藏尊像を奉納し、平泉寺へは赤銅に黄金を交えた梵鐘を鑄造・寄進したこと、そして、自分の住む地名を平泉と改め、その後、愛孫1人を平泉寺に遣わし金台坊という寺坊を開いたことなどが記されているという⁽³³⁾。一方、中尊寺白山社の社伝によれば、「仁明天皇の御代の嘉祥二（849）年、慈覚大師が一関磐井川の上流（現在の一関市本寺）に加賀の一の宮（白山本宮・石川県鶴来町の白山比咩神社）より分霊されてあったものを、この関山に遷座し勸請されたと云われて来ている。勸請と同時に白山権現と号せられ、十一面観音を本尊とした」もので、天明六（1786）年に現在の位置に移ったとされる。秀衡が平泉寺とのパイプを重要視した背景には、奥州から京への日本海ルート確保のためといった理由が考えられるが、平泉史研究の第一人者・大矢邦宣の、白山神がもともと「産金に縁の深い神」であり、十一面観音も同様だったという指摘は注目し値する。ここでも梵鐘の鑄造などの記録がみえ（のちに仙台藩に伝わる「秀衡四十八鐘」とも関連）、南朝の没落によって熊野修験にとってかわって勢力を伸ばしたとされる白山修験（山伏）が鉾山開発に係ったという見方もある⁽³⁴⁾。

しかし、白山信仰には、本来御輿渡御といった祭礼はなく、中尊寺の祭礼には他の御霊性が高い鎮守社の祭礼が採り入れられたと考えるのが適当だろう。今までみてきたように、一つ物にせよ馬長にせよ、御霊性が高い祭礼には、御輿渡御の際、田楽や周囲の騒音も含めて大きな音が常に鳴っていた。しかし、中尊寺に伝わる記録類によれば、御輿と同じく神霊が宿るべき御一馬の渡御にあたって、どのような音がしていたのか、明確な記録はなかった。しかし、渡御が全く無音にて移動していたとは考えにくい。そこで、注目したいのが、前掲、本田が引いた中尊寺北本坊薬樹院の北嶺亮詮からの書簡にあった「同音にて声を立て、走り、一の鳥居にて兔を捨て、小児馬は走りて神前に至り」という箇所である。移動中に「同音にて声を立て」というのは、田楽のような楽器ではなく、声というわけだが、これは、現在でも春日若宮おん祭で、深夜、若宮神が若宮本殿よりお旅所の行宮へお遷しする「遷幸の儀」と帰りの「還幸の儀」でなされている古式中の「警蹕」に当たると考えられる。ここでは神霊を柳の枝で何重にも囲み、言わば御輿状態にして渡御するのだが、その際全員で「ヲー、ヲー」という声を途切れないように出し続ける。さらに渡御中、供奉する楽人たちが、道楽として「遷幸の儀」では「慶雲楽」を、「還幸の儀」では「還城楽」を奏し続ける。警蹕とは、日本伝統芸能史研究者・木戸敏郎によれば、警蹕とは「声による記号で、言葉がない。邪魔になるものを払い除く声で、貴人が道を行くときの先祝いの声、或いは御神体か渡御するときの、あたりを祓い潔めるための声である。無声音の「シーッ」と、有声音の「オー」とがあるが、現在では有声音の警蹕だけが行われている」⁽³⁵⁾。まさにこうした〈音風景〉を確認すれば、この御一馬が単なる風流として片づけられることはないことがよく理解できよう。当時は、ここでの警蹕や梵鐘の音の

ように、ノイズ的な音自体にも穢れを祓う効力があると信じられていたのであり、それは祭礼に導入された田楽や神楽その他の音と同様である。つまり、平泉に畿内の鎮守4社が勧請され、さらに平泉が産金や鑄造に関する白山信仰とも関連をもつように、それら全ての霊力をもって、都市平泉を「聖・浄」に保つために〈音風景〉も構成されていたと考えられよう。騒音と一種の移行状態との間に普遍の関係性があることを指摘したのは、文化人類学者ロドニー・ニーダムの有名な論文「打ち叩きと移行 Percussion and Transition」(1967年)⁽³⁶⁾であった。ニーダムによれば、あらゆる通過儀礼にこの関係性は見いだされるのだが、霊的な世界や「他界とコミュニケーションするため、叩いたり振ったりすることで生み出される音がこれほど広く用いられている」という彼の指摘は、この「平泉諸寺祭礼曼荼羅」右幅の〈音風景〉にも当てはまると言えよう。

5. 結びにかえて

現行の「春の藤原まつり」では、「御一馬」はもはや祭礼から消えたままだが、「平泉諸寺祭礼曼荼羅」左幅に描かれた「哭まつり」はまだ行われている。現行の「哭まつり」も、左幅に描かれた内容とはだいぶことなり、基本的に粛々と静かに行われているが、少なくとも御輿渡御という形は残されている。中尊寺最大の祭礼であった御一馬におけるかつての喧騒は、今や、まさに別表に記したように、義経東下りの行列の見物客が立てる喧騒と金管楽器&打楽器が際立つバンドの音によってとって代わられたが、後者はいわば田楽的なノイズに対応するものとして考えると〈音風景〉的には、それはそれで興味深い。

金属音に関連して最後に付言すれば、「平泉諸寺祭礼曼荼羅」を「平泉諸寺参詣曼荼羅」(桃山末期)と比較した時、祭礼の描写の有無以外にも極めて重要なポイントがある。それは、「鐘(楼)」の描写である。人物も含めて堂宇についてもきわめて細かく描写されている後者には、実は、鐘が1つも描かれていないのに対して、前者には、右幅に2箇所(弁天池右横と前述・二階大堂の右横)、左幅に4箇所(金堂円隆寺右上、観自在王院、熊野三社内、日吉・白山社内)、鐘楼が配置されている。さらに前者では、鐘の文様についても比較的細かく線が描き込まれており、堂宇の壁の描写がきわめてシンプルであるのと相俟って、鐘の存在感が際立つようになっている。つまり、絵画的にははるかに完成度が高い「平泉諸寺参詣曼荼羅」に対して、技術的にはきわめて稚拙と言える「平泉諸寺祭礼曼荼羅」の描き手が意図していたのは、前者に欠けていた〈音風景〉を描写することであったと考えられる。特に、右幅で鎮守社に鐘楼が置かれている描写が示唆的なのであるが、平泉における「鐘」および「鐘聲」に関する〈音風景〉については、別稿⁽³⁷⁾にて論じたので、そちらを参照されたい。また、「はじめに」でも述べたように、紙幅の都合上、これら曼荼羅の画面そのものについての分析および「平泉諸寺祭礼曼荼羅」左幅の〈音風景〉についての考察は割愛せざるをえなかったため、次稿⁽³⁸⁾に送ったこととお断りしておく。併せてお読みいただければ幸いである。

註

(1) 「用語と考え方 サウンドスケープとは？」日本サウンドスケープ協会公式ウェブサイト (<http://www.>

saj.gr.jp/soundscape/glossary.html#soundscape / 2012年9月末現在)より。

- (2) R・マリー・シェーファー『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』（鳥越けいこ他訳，平凡社，1986年）28-30頁。

- (3) 相原友直『平泉雑記 卷之五』より「白山社祭禮式（十三）」の項（南部叢書刊行会編『南部叢書（三）』歴史図書社，1970年，629-630頁）の引用：

「白山権現ハ中尊寺一山ノ鎮守也，社内ノ宮殿高六尺程横モ同之與ユキ一尺六寸餘其後ロニ焼印アリ，宮殿建立徳治三年大檀那法橋實源ト記ス，神體ハ昔ヨリ秘シテ不許拜見之，本地佛十一面観音，慈覺大師ノ作宮殿ノ外ニ安ズ〇祭禮毎年四月初午・未兩日ナリ，午ノ刻ニ宮殿ノ内ニ山吹ノ枝葉共ニ長一尺ホドニシテ一東ヲ納ム，次ニ獅子舞アリ，次ニ御一箇馬一山ノ中ニテ七歳ノ男子ヲ選ミ，二七日潔齋ヲ爲サシメ裝束ヲナサシメ腰ニ葦葉ヲ挟ミ飾レル馬ニ乗ル，口附ノ者兩人笠ノ上ニ日月ヲ造リ立テ戴ク供奉六人皆造リ花ヲ立タル笠ヲ戴ク，長刀・木太刀・脱沙兔ヲ持ツ，金堂跡ヨリ乗出シ白山社前ニテ馬ヨリオリテ笠ノ造リ花ヲ四方ニ投スツル馬ヲ急ニ牽還ス，此馬嘶時ハ凶ナリト云，次ニ田楽，胡桃木ノ皮ヲ以テ二尺餘ニ方ニアジロヲ組ミ平ラカニシテ四方ニシテ下ケ上ニ造リ花ヲ立テ〇伊校本，四方にシテ云々ヨリ造リ花ヲ立テマデナシ 笠ノ如ニ頭ニ戴キ太鼓ヲ首ニ掛テ戴ク者アリ，サ、ラヲ以テ鳴スモノアリ，都テ八人樂屋ヨリ笛・太鼓ヲ以テ打チハヤシ舞フ〇伊校本，打チハヤス，拍子ヲ踏テ躍リ舞フ 次ニ開口老翁ノ假面ヲ粧裝束シテ山ノ縁記風景ヲ稱美シテ立ナガラ東西南北ニ向テ唱フ次ニ祝詞公家冠裝束シテ幣帛ヲ持テ白山宮ニ向ヒ山ノ由來ヲ演テ天下泰平・國家安穩・五穀成就・國守ノ息災ヲ祈リ當日參詣ノ者マテモ息災福壽ヲ祈ル，次ニ〇伊校本，次ニノ二字ナシ 若女ノ舞，若キ女ノ假面ヲ粧ヒ鈴ヲ振り扇ヲ以テ舞，次ニ老女舞老女ノ假面ヲ粧ヒ腰ヲ屈メテ鈴扇ヲ以テ舞，次ニ能數番〇伊校本，以テ舞フ次ニ能數番 一山ノ衆徒各其役ヲ勤ム。」

- (4) 「かすむこまがた」の本文初めには「天明八年といふ年の戊申の正月朔日」，「はしわのわかば」の序文には「天明八年戊申六月二十九日」とあるが，それは菅江真澄が後年に行った改写の際の写し間違いである。詳しくは，以下を参照のこと。内田武志「解題」（『菅江真澄全集』第1巻，未来社，1990年）495頁。以下，「かすむこまがた」と「はしわのわかば」より，該当箇所を引用しておく。

「かすむこまがた」（『菅江真澄全集 第1巻 日記I』，未来社，1990年，338頁）より：「～こゝに白山ノ神また日吉ノ神をうつしまつりて，此二柱の御神山をまもらひ鎮座り。四月ノ初午ノ日は白山神の祭にて，七歳男子を馬に乗て粧ひたて，白兔の作り物あり。此白兔は従者にて，もろこしより神のぐし給ひしまねびといへり。此処に斉奉る白山ノ神靈は八十一隣姫の神にはおまします，その韓神にてぞいまそかりける。其日は田楽，うば舞，さるがうなゞどありて，賑へるよし人の語る。～」

「はしわのわかば」（同上，372頁）より：「～かくて中尊寺にいたれば，あるとある堂の戸みなおしひらきて，白山姫ノ神社の拜殿は，かねて，かゝる料に間広げに作りなしたるに，白き幌をたれ，白き帽額引わたしたり。おひとつうまといひて白き神馬，獅子愛しとて，ぼうたん手ごとにもたる童子なにくれとねり渡りはつれば，白山ノ神の御前に幔うちまうけたる舞台にのぼりて，そうぞきたつ田楽開口祝詞をはれば，若女ノ舞，老女ノ舞なゞど，いと古風めかしきさま也。やをら衆徒集りて，さるがうはじまりぬ。法師の頭に宿髪てふものにして髪髻，墨衣の袖をぬぎかけ，あるは，まくりでにつゞみうち，笛吹囃しぬ。この田楽，をとめ舞，うば舞などに事はかりて今めかしけれど，舞へる装束は国ノ守より寄附給ふものとて，めでたく奇麗をつくしたり。～～（中略）～～十日 けふもさるがう舞あり。～」

- (5) 本田安次「芸能」（藤島玄治郎監修『中尊寺』河出書房新社，1971年）290-299頁。

- (6) 門屋光昭「菅江真澄と平泉の祭礼・芸能 一芭蕉の『奥の細道』「平泉」にふれながら」（盛岡大学『日本文学会誌』第11号，1999年）35-38頁。

平泉〈音風景〉のアルケオロジー

- (7) 『年中行状記』『関山中尊寺歳中行事』両文書については以下の文献を参照した。佐々木邦世編『中尊寺史稿』（中尊寺，1983年）157-181頁。
- (8) 高平眞藤編『平泉志 卷之下』（再版，鶴揚社，1891年）4-5頁。
- (9) 前掲『中尊寺史稿』160頁。ちなみに，正月については当然のことながら元日から八日まで様々な行事があるが，基本的に勤行関係が中心となる。記述内容は何時からどこで何が行われるかといったことで，音風景的に注目されるのは，前掲2月と同様，時鐘と神樂，読経の声だけである（神樂については，元日から8日まで，11日，14日，15日，28日の朝に行われる）が，正月2日晚に惣別當で誦い初めが行われていることにも注目しておこう。ちなみに，これについての記述は，『関山中尊寺歳中行事』の方が詳しく書かれており，「諷（誦）初 今夜於惣別當一山集會，囃子三番，手酒肴三種」とある。同上，173頁参照。
- (10) 同上，160頁。
- (11) 同上，174頁。
- (12) 同上，161頁。
- (13) 中尊寺一山の院号・坊号に准ずる号。中尊寺院主坊の「門前」として抱地を工作し，代々中尊寺の承仕を務め，白山社の祭礼で御一馬行列の鉦を持ったり，田楽の道具を運んだり，ここでのように惣別當の装束を直すといった役割を担ってきた。詳しくは，同上，106頁を参照のこと。
- (14) 同上，163頁。
- (15) 松村博司・山中裕校注『日本古典文學大系76 榮花物語 下』（岩波書店，1965年）111頁。
- (16) 林屋辰三郎校注『日本思想大系23 古代中世藝術論』（岩波書店，1973年）218頁。
- (17) 前掲『平泉志 卷之下』，32頁。
- (18) 森口多里『岩手県民俗芸能誌』（錦正社，1971年）1366頁。
- (19) 本田，前掲論文，291-292頁。
- (20) 福原敏男「一つ物」（小島美子他編『祭・芸能・行事大辞典 下』朝倉書店，2009年）1484頁。
- (21) 福原敏男『祭礼文化史の研究』（法政大学出版局，1995年）214頁。
- (22) 永島福太郎「春日若宮祭と一つ物」（『芸能史研究』97号，1987年）1-20頁。
- (23) 福原敏男「一つ物研究のはじまり 一馬長研究との交差—」（『芸能史研究』183号，2008年）60-75頁。
- (24) 東北大学東北文化研究会編『奥州藤原史料』（吉川弘文館，1959年）183-184頁。
- (25) ちなみに，科学史家・吉田光邦は，この巻十一の馬長の行列に武士が描かれている場面が多いことから，これが祇園祭ではなく，藤森社の祭ではないかと推測している。吉田光邦「『年中行事絵巻』考」（小松茂美編『日本の絵巻8 年中行事絵巻』中央公論社，1987年）147頁参照。
- (26) 同上。
- (27) 山路興造「祇園御霊会の芸能 一馬長童・久世舞車・羯鼓稚児—」（『芸能史研究』94号，1986年）15-29頁。
- (28) 前掲『奥州藤原史料』103頁。
- (29) 菅野成寛「都市平泉における鎮守成立試論 一靈山神と都市神の勧請—」（『岩手史学研究』第77号，1994年）17-49頁
- (30) 伊藤喜良「四角四堺祭の場に生きた人々」（『歴史』第66輯，1986年）17-37頁。および同「中世における天皇の呪術的権威とは何か」（『歴史評論』第437号，1986年）34-53頁。
- (31) 塙保己一編『羣書類従』第2輯（神祇部第二・卷第二十三，群書類従刊行会，1959年）248頁。ちなみに，江戸前期の国学者・今井似閑（1657-1723）が採択した風土記逸文は，以下のように改変され，木との関連を強調している。「風土記曰 稱伊奈利者 秦中家忌寸等遠祖 伊侶具臣秦公 積稻梁 有富裕

木村直弘

乃用餅爲的者 化成白鳥 飛翔居山峯生 伊彌奈利生 遂爲社名 至其苗裔 悔先過而 拔社之木
殖家禱祭之 今殖其木 蘇者得福 殖其木 枯者不福」(植垣節也校注『新編日本古典文学全集 5
風土記』小学館、1997年、419-420頁)。

- (32) 桜井徳太郎・萩原龍夫・宮田登校注『日本思想大系20 寺社縁起』(岩波書店、1975年) 367頁。
- (33) 『国史跡平泉寺の整備情報誌 平泉寺かわら版』第34号(勝山市教育委員会史蹟整備課、2011年7月号)
2-3頁。
- (34) 大矢邦宣『奥州藤原氏五代 みちのくが一つになった時代』(河出書房新社、2001年) 207-210頁。
- (35) 木戸敏郎「今日に息づく警蹕」(日本伝統音楽芸能研究会編『邦楽百科CDブック 日本の音1 CD
D版 声の音楽1』音楽之友社、1996年) 186頁。
- (36) ロドニー・ニーダム(長嶋佳子訳)「パーカッションと移行」(『ユリイカ』第22巻第5号、1990年) 114頁。
- (37) 木村直弘「平泉 音の古層 —中尊寺供養願文のサウンドスケープ—」(藪敏裕編『平泉文化の国際
性と地域性』汲古書院、2013年刊行予定、入稿済)。中尊寺供養願文における〈音風景〉について論じ
たこの論文は、この小論の姉妹編なので、併せて参照されたい。
- (38) 「平泉諸寺祭礼曼荼羅のサウンドスケープ —〈哭まつり〉再考—」というタイトルで『岩手大学教
育学部研究年報』第73号(2014年)か『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第13
号(2014年)に投稿予定である。

[付記]

本稿は平成24～26年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)(課題番号:24531052)による研
究成果の一部です。

平泉〈音風景〉のアルケオロジー

別表：平成24年度「春の藤原まつり」スケジュール 5月1日(火)～5日(土)／*印：雨天により中止

月日	開始時間	中尊寺	平泉町駅前広場, 旧観自在王院庭園他	毛越寺
5月1日	10:00	藤原四衛公追善法要 [本堂]	弁慶の力餅つき [駅前広場]	開山大師並に藤原四衛公報恩法要 [本堂]
	10:30	稚児行列 [本堂→金色堂]	郷土芸能 (一関・舞川鹿踊) [駅前広場]	
	12:30			
	15:00	郷土芸能 (一関の舞川鹿踊)		
5月2日	10:00	開山護摩供法要 [開山堂]		郷土芸能 (江刺・行山流角懸鹿踊)
	10:30	郷土芸能 (一関・市野々神楽)	郷土芸能 (江刺・行山流角懸鹿踊) [駅前広場]	
	11:00		源義経公追善法要 [高館義経堂]	
	12:30	郷土芸能 (江刺・行山流角懸鹿踊)	郷土芸能 (一関・市野々神楽) [駅前広場]	
5月3日	09:40	長島小学校合奏団 [毛越寺へ出発]	→→→【藤原秀衡公出迎行列】→→→	藤原秀衡公出迎行列 [中尊寺より到着]
	10:00		平泉中学校吹奏楽部演奏 [旧観自在王院庭園]	
	10:30	藤原秀衡公出迎行列 [毛越寺へ出発]		
	11:15		岩手放送ラジオ公開録音 [民謡回り舞台] [旧観自在王院庭園]	
	11:30			
	12:40			
	13:15			
	13:30			
	15:00		←←←【源義経公東下り行列】←←←	
	15:20	源義経公東下り行列 [毛越寺より到着] 金色堂奉拝 [金色堂]		
5月4日	10:00	白山神社献饌行列	町内神輿 (友和会と睦会)	郷土芸能 (江刺・行山流都鳥鹿踊) * 郷土芸能 (胆沢・朴之木沢念仏剣舞) * 郷土芸能 (平泉・達谷窟毘沙門神楽) [駅前広場] * 郷土芸能 (江刺・行山流都鳥鹿踊) 郷土芸能 (平泉・達谷窟毘沙門神楽)
	11:00	郷土芸能 (平泉・達谷窟毘沙門神楽) *		
	11:30	郷土芸能 (胆沢・朴之木沢念仏剣舞) *		
	12:00	郷土芸能 (胆沢・朴之木沢念仏剣舞) *		
	12:30	白山神社祭礼・古実式三番 [白山神社]	郷土芸能 (江刺・行山流都鳥鹿踊, 平泉・達谷窟毘沙門神楽) [駅前広場]	
	13:00			
	14:00			
	14:30			
15:00	狂言 [佐渡狐] [同上]	郷土芸能 (胆沢・朴之木沢念仏剣舞) [駅前広場] *	哭まつり [毛越寺⇨観自在王院阿弥陀堂]	
5月5日	10:00		弁慶力餅競技大会 [平泉駅前]	延年の舞 (唐拍子, 若女福宜, 老女, 王母が昔)
	11:00			
	12:00	古実式三番 [開口] [白山神社]		
	12:30	狂言 [仏師] [同上]		
	12:30	能 [秀衡] [同上]		
	13:00			